

『神が行われたこと』 井上隆晶牧師

使徒言行録 21 章 1～24 節、ヨハネによる福音書 8 章 42～47 節

### ①【聖霊に促される信仰】

パウロは第二回伝道旅行を終え、エルサレムに帰ることになりました。ミレトスでエフェソの長老たちを招き「私は“霊”に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。ただ投獄と苦難とがわたしを待ち受けているということだけは聖霊がどこの町でもはっきり告げてくださっています。」（使徒 20：22～23）と言いました。カイサリヤでは福音宣教者フィリポの家に泊まりますが、アガポという預言者が来て、パウロの帯を取り、それで自分の手足を縛り、「聖霊がこうお告げになっている。エルサレムでユダヤ人は、この帯の持ち主をこのように縛って異邦人の手に引き渡す。」（使徒 21：11）と言いました。行く先々で、聖霊はパウロが投獄されることを教えました。人々は、パウロにエルサレムに行かないように頼みますが、パウロはそれを聞き入れず、エルサレムに上って行きます。自分がエルサレムに行くのは、聖霊に迫られ、促させて行くのだ。自分もそうしたくない思いがある。でも聖霊がそうさせているのだ、ということを行っているのです。

●黒人解放運動を指揮した、マルチン・ルーサー・キング牧師は『汝の敵を愛せよ』という本の中で、こんなことを語っています。「家族と私が死の脅威にさらされなくて過ごした日は、ほとんど一日もない。私は、刺されてほとんど致命的な傷を負ったこともある。本当の意味で私は、迫害の嵐に打ちのめされてきたのだ。ある時などは、もうこのような重荷には耐えられないと思い、もつと静かで、のどかな生活に逃げ込もうとする誘惑にかられたこともあったことを、告白しなければならない。しかし、そのような誘惑が現れて来るたびに、何ものかが私の決意を強め、支えてくれた。」

こんな運動さえしなければ安全だし、平和な生活ができる、そうやって生きている人もいます。自分がいくら叫んだところでどうなるわけでもない、もうやめよう、としばしば思うこともある、でも不思議な力が働いて、自分を駆り立てるのだというのです。この「何ものか」というのが聖霊なのです。

●榎本保郎牧師はこう書いています。「聖霊による迫りとは、それは損だ、それはつまらないことだと分かっているのに、なぜかそうせずにはいられなくさせてゆく力のことであると思う。自分の命も、そのほかのいろいろのものも問題とさせないで、私たちをその道へと追いやってゆく、そういう力ではあるまいか。」

パウロは、自分の行いによって救われるのではなく、一方的にキリストによって救われることが分かった時、ものすごく嬉しかったのだと思います。そこまで救いというものを真剣に考えていたということです。だからこそ自分の命を捨ててもそれを伝えたかったのです。

●榎本保郎牧師はこうも書いています。「福音のために自分の命も惜しまぬ情熱がなく、いったい何をもって福音を語り得ようか。命も惜しまない福音であればこそ、人々に語れるのではないか。安楽な生活を確保しながら福音を語って、どれだけ人々の魂に響くだろう。福音にまっしぐらに生きる姿が人々を恐れさせるのである。」

## ②【人間の力で信じる人と、神の力で信じる人】

エルサレムに着くと、エルサレム教会の監督であるヤコブと教会の長老たちに挨拶し「自分の奉仕を通して神が異邦人の間で行われたことを」（使徒 21：19）詳しく説明しました。パウロはいつもこういう話し方をします。第一回伝道旅行の時も「神が自分たちと共にいて行われたすべてのことを報告した。」（使徒 14：27）と書かれています。「私がこういうことをした」と言わないで、「神が私を通してこういうことをしてくださった」と言うのです。主語が誰であるか、私なのか神なのか、これは私たちの信仰によってとても大切なことです。

●使徒言行録の中にアポロという人物が出てきます。アレキサンドリア生まれのユダヤ人で、聖書に詳しく、雄弁であったと紹介されています（使徒 18：24）。ところがペトロやアンデレは、漁師であったというだけで、有能か、信仰深いか、全く書かれていません。アポロは教師としては有能でしたが、欠けたところがありました。それが使徒言行録 19 章に出てきます。パウロがエフェソにいるキリスト教信者たちに会った時に、何かおかしいと感じたので「信仰に入った時、聖霊を受けましたか」（使徒 19：2）と尋ねると、彼らは「いいえ、聖霊があるかどうか、聞いたこともありません。」と答えます。パウロが「それなら、どんな洗礼を受けたのですか」と聞くと「ヨハネ（洗礼者）の洗礼です」という返事が返って来ました。この聖霊を知らない弟子たちはアポロに教えられた弟子たちでした。アポロの問題点は、聖霊によって信仰するのではなく、人間の力で信仰するというものでした。

聖書には二種類の信者が出てきます。これは今のキリスト教世界でも同じです。人間の力で信じる人と、神の力で信じる人です。肉の信仰と、聖霊の信仰と言い換えることもできます。人間の力で信じる人は、「自分はこれこれをした」と言いますが、聖霊によって信じる人は「神がこれこれをされた」と言います。私は何者であるかということは大した問題ではありません。神がこんな私を選び、一方的に働いて何をなされたかが一番大事なことなのです。神のことを語りましょう。神を体験したことがない人は、神を語ることはできません。だから人間的なことしか話せないのです。神の香りがしないのです。今も、肉の信仰をする牧師、信者がいます。彼らに気をつけましょう。

## ③【信仰の誘惑とは、肉で完成させようとする働き】

パウロの報告を聞いて、エルサレム教会の人々は神を賛美しました。その後にパウロにいいました。あなたは律法を破っており、モーセから離れるように教えて

いるという噂がここまで流れてきています。そこで誓願を立てた人といっしょに神殿に行って身を清めてもらい、彼らの費用を出してやり、自分は律法を守って正しく生活していることを皆に見せて証明してください。そうすれば誤解が融けるでしょう。神の働きを賛美したのですから、この問題も神に解決してもらおうと言うのなら分かりますが、すぐに人間的な工作を考え、人間の力で切り抜けようとしたのです。ここに信仰の誘惑があります。「大勢の人があなたを誤解し、憎んでいます、あなたは自分の信仰を貫き、エルサレムでもあなたの信仰を語りなさい。神は必ず、あなたが正しく、あなたの信仰が真実であることを示してくださるだろう」と祈れば良かったのです。すぐに神を忘れてしまい、人間の力や謀で信仰しようとする。これがエルサレム教会の中心メンバーたちでした。しかし、この人間的な謀はすぐに挫折します。パウロは神殿にいる時に、ユダヤ人に捕らえられ群衆から暴行を受け、都は大騒ぎになり、ローマの千人隊長が出動してパウロを保護することになりました。パウロが兵營に連れていかれる時、千人隊長に「どうか、この人たちに話をさせてください」（使徒 21：39）と願って、階段の上に立って、復活したイエス様に出会った自分の体験談を話しました。人間的な工作で切り抜けようとしたことが間違いであり、自分がなすべきことは神が自分になされた不思議な業をはっきりと告白することだと悟ったのです。これはパウロの悔い改めでしょう。使徒言行録は、私たちに信仰生活のありようを教えてください。聖霊で始めたのですから、肉で仕上げてはいけません。肉に戻ってもいけません。ガラテヤ教会もそうでしたが、今のキリスト教会も同じ誘惑に落ち込んでいます。神が私に近づいて来られたのです。神の国が、天から地に来たのです。そうやって私に触れ、私の中に信仰が、命が始まったのです。それを喜びましょう。神が私たちに何をなされたのか、それを飛び上がるくらいに喜べる私たちであり続けたいと思います。